

## 講演 2

## ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み



田村 将人

プロニスワフ・ピウスツキがサハリンにいた 19 世紀末から、彼が去った後の 20 世紀前半の樺太アイヌの歴史を紹介する。この間、樺太アイヌの人口は、幕末には約 2,000 人で、20 世紀半ばには 1,312 人（1944 年末、樺太庁調べ）という推移をたどった。

## 1. 民族名称の多様性

まずは、いくつかの民族名称から、周辺諸民族・諸国家との関りを見ておきたい。

## (1) 樺太アイヌ &lt; からふと／カラフト

日本では江戸時代から「カラト」や「カラフト」などと表記され、漢字では「唐太」などと表記されたこともあり、中国製品の交易路であったことから唐=中国につながるという説もあった【東2003】。江戸幕府によって北蝦夷地と呼ばれていたが、1869(明治2)年に明治政府によって「樺太」と制定された。これまで語源に関しては諸説あるが、アイヌ語のカラフト karapto という単語に由来すると考えられる。筆者は、日本領樺太における同化政策によって日本国民となった樺太アイヌが、ソ連侵攻の1945年以降に北海道以南の地へ和人とともに移動したことから、「樺太」の歴史と切り離せないと考えて樺太アイヌの名称を使っている。

## (2) サハリンアイヌ &lt; Сахалин／Sakhalin／薩哈隴／薩哈林

現在、一般的に使われるサハリンは、満洲語のサハリヤン ウラ アンガ ハダ sahalijan (ula) angga hada「アムール川の河口の(対岸の)岩のがけ」に由来する【池上2004】。筆者は南北に約2,000 km もの細長いあの島を呼ぶ場合に、時代を問わない地理的名称として「サハリン」を使っている。また、主に1920～25年日本軍が北サハリンを占領した際に「サガレン」という言葉が使われた。

## (3) エンチウ

金田一京助は、エンチウという単語について、樺太アイヌが「enju と自分でも呼んで、enju と ainu とを併用していて、enju の方は古語で、雅語であると称している。即ち叙事詩や祈祷の語、談判語や、会釈の辞など、改まった時に用いる語で、叙事詩に「半神、半人」の英雄とたたえる時など、よく arkir kamui arkir enju というのである」と説明している。また、エンチウの「古形 emchuiu だったからこそ、エミ

チ、エミシの形が出たのであろう」と推測し「アイヌの enju が日本語になるには enjo となるはず」として、蝦夷(えみし、えぞ)という単語と関係があると指摘した【金田一1931】が現在では支持されていない。知里真志保は、エンチウは雅語で「①人。②男」という意味があるとし、マテンチウも同じく雅語で「女(女・人)」と辞典に記載している【知里1954】。

河野広道が、墓標の型式からアイヌ文化の地域差を検討した論文で、サハリンに関しては地域集団の名称として「東エンヂウ」系と、さらに北海道の余市を含めた「西エンヂウ」系として、エンチウの単語を用いて考察している【河野1931】。以上のことは、児島恭子がすでに整理している【児島2003】。

1908～11年に樺太庁の先住民族政策の担当者だった葛西猛千代は、「エンジウ 之れはアイヌ民族名の変体語とも申すべきもので例へば見知らぬアイヌが通行するのを見てアレハどこそこのアイヌだよと言へば、先方は聞いて不快の感を懐くからアレハ何処其処の「エンジウ」(アイヌ)だと云ふ変体語で、恰かも日本人同士が日本人を指してアレア一日本人だと云ふのを邦人だと云ふのと同じ意義である」【葛西1931】とたとえている。

これと同様の例を菊池徹夫は、戦後北海道に移住した樺太アイヌの藤山ハルさん(1900年生)から聞いた情報を次のように紹介している。「「アイヌ」と同じように、人とか人間の意味だけど、「エンチウ」は「アイヌ」よりずっと古くて立派な言葉だ。カムイに祈る時なんか使ったんだ。マオカ(真岡=ホルムスク)ではふつうの時でも「エンチウ」を使ってた。とくに、内緒話・ひそひそ話の時に使ったよ」【菊池1989】。ライチシカ出身の藤山さんは1940年代にマオカ周辺に住んでいたため、その経験に基づいているのだろう。

葛西と菊池が紹介する日常の用例に共通するのは、アイヌという単語の言い換えとしてのエンチウの使用例である。同化政策が進められた結果、1920年代以降、差別語となっていたアイヌに代わって、北海道においてウタリ「同胞」という単語が使われ始めた実態に似ている可能性がある。現在では、エンチウを自称として使用する人たちもいる。

#### (4) クギ、クイ、クイエ <kuyi/kui/kuye

これらはカタカナで簡易的に表記したもののだが、樺太アイヌと隣り合うニヴフ、あるいはウイльтаやナーナイ、ウリチ、満洲などのツングース系諸民族による呼称である。現在の中国の地図では庫頁 kuye 島(薩哈噠も併記)と表記され、さながら「アイヌ島」という意味になる。中国の正史には歴代、「骨嵬」(元)、「苦夷」(明)、「庫頁」(清)などの表記が登場する。

1264年以降、元に服属していたニヴフが「クギ(アイヌ)が毎年侵入してくる」と訴えたことから、元がアイヌを攻撃し戦いが続いたが、1308年、アイヌが毛皮の朝貢を条件に元に服属を申し入れて戦いが終了した。アイヌが鷹の羽や毛皮を求めて北上したことが背景にあるようだ【中村2014】。その後、清や先住民族と日本をつなぐサンタン交易が17~19世紀にかけて盛んにおこなわれた【佐々木1996】。

## 2. 19世紀後半における樺太アイヌの2度の大移動

先住民族の生活にも影響を及ぼすようになったサハリンをめぐる日露間の外交関係を概観する。1875~1945年の間に、集団としての大きな移動が3回もあったことに注目したい。

1855年日露親善条約によって択捉とウルップの間に国境画定したが、サハリンは未画定のままとなった。1858~60年アイグン条約と北京条約によってアムール河の露清国境が、ほぼ現在と同じように画定した。1868年カラフト島仮規則によって、サハリンは日露雑居=共同領有ということを確認。ロシアはサハリンを流刑地とする。1875年樺太千島交換(サンクトペテルブルク)条約によってサハリンの全島がロシア領に、千島列島全部が日本領になる。同条約附録第4条により、先住民族は3年以内に日露どちらに属するか決定できるとしていたが、サハリンから撤退する日本の政府は、サハリン最南部のアニワ湾沿岸に住む、とくに日本の漁業家との関係が深かった樺太アイヌ841人をまず北海道の宗谷へ、翌1876年に札幌近郊の対雁に強制移住した(1回目の集団としての大きな移動)。この対雁に日本で初めてアイヌ児童のための学校が設立され、卒業生の中には上級学校へ進学する者もいた。石狩川河口に漁場が割り当てられる。農業も勧められるがなじまなかった。その他、製網所での労働に従事した【樺太アイヌ史研究会編1992】。

なお、北海道において約350人がコレラなどの流行病で亡くなり、残った約10人以外は、すべて1890年代から1905年にかけてロシア領サハリンへと帰還した(2回目の集団としての大きな移動)。こ

のように、ひとつの民族集団の約半数が新たにひかれた国境を跨いで2度も移動し、さらに北海道でその約半数が命を落としたという事件は多くの人が知るべき歴史である。

ピウスツキによる1905年1月の統計では、樺太アイヌの人口は1,362人で、うち203人は北海道からの「日本国籍を有する」帰還者だったと記録されている【井上2018】。このことから、サハリンにそのまま暮らしていた約1,100人は、ロシア領で刑期を終えたロシア人や、脱走囚による強盗、殺人などの事件に巻き込まれることになった【田村2011】。

## 3. プロニスワフ・ピウスツキが来たころ

1887年、ピウスツキは政治犯としてサハリン島に送られた。1897年の刑期終了後、帝室科学アカデミーからの依頼を受けて樺太アイヌ、ニヴフやウイльтаなどサハリン先住民族の言語・文化調査を行った。口承文芸や民族誌等の論文のみならず、物質資料、写真資料、音声資料など多岐にわたる資料を残した【沢田2019】。1902~05年、サハリン島軍務知事らの資金によって、樺太アイヌのための学校を作り、教師にはニヴフ男性のインディンのほか、北海道から戻った千徳太郎治や、ロシア領サハリンで生まれ育ったトウイチボが就いた【田村2013】。

19世紀末、日露関係が悪化し1904年2月に朝鮮半島や中国東北部を戦場として開戦した。サハリンが戦場となるのは日露戦争の最終盤の1905年7月だが、日本人と関係が深い樺太アイヌに対して、ロシア人の態度は冷ややかになっていったようだ。その当時の様子をピウスツキが記録している。「学校の子供たちはほとんどが親に引き取られた。そのうちの何人かは、万が一のときには親と一緒にいて、共に死にたいともらした。実際、誰も理性をなくしたように思われる不安な時になっていた。〔中略〕アイヌの立場は危機的であった。アイヌが日本人に対して非常な共感を持っていることを、皆は知っていたから、サハリン占領の時が近づくにしたがって、敵の侵攻が望ましく、また、いずれにしても危険ではない人びとに対する憎悪はますます深まった」【荻原2000】。経済的にも軍事的にも大きな力を背景とした日露という国家及びその国民の間で、先住民族が危険な状態に置かれたことも再認識しておきたい。

ピウスツキは軍務知事からの依頼で、樺太アイヌに関する生活実態調査を行い、統治規定草案をまとめて提出していたが【井上2018】、彼自身は日本軍が上陸する以前にサハリンを離れ、樺太アイヌの居住地が日本領になったため施行されることはなかった。

#### 4. 日露戦後の日本統治時代

1905年9月に日露講和(ポーツマス)条約が締結され、北緯50度以南が日本に割譲された。1907年3月までは樺太民政署が、それ以降は樺太庁が統治した。葛西猛千代は、ある樺太アイヌ首長の日露終戦当時のエピソードとして、次のような内容を紹介している。月40円でロシア軍の通訳をしていたが、裏では日本人の“片割れ”として日本軍の勝利を望んでいた。だが、戦後、我われの漁場は入札によって和人のものになってしまった。ロシア領時代は“放漫”なやり方でとても都合が良かったのにと、役人に不満を述べるものだった【葛西1928】。

またしても、日露間で国境が変更されるにあたり先住民族の地位に変化があったことになるのだが、このポーツマス条約では日本領になったサハリン南部の先住民族の処遇を詳細に決めず、日本の漁業者のために1905年秋の操業を復活させることを優先したのだった。そのようなことが上記の不満につながっていた。

つまり、1875年の樺太千島交換条約の締結以降ロシア領サハリンに居住していたロシア国籍の樺太アイヌやウイльта、ニヴフなどのサハリン先住民族の処遇がポーツマス条約で決められなかったのだ(ただし、北海道から戻った樺太アイヌは日本国籍)。そして、ロシア革命によってソ連政府が樹立されると、国外にいる旧ロシア国籍者に対してソ連国籍の取得希望者に関する公告が出されたが、結果としてサハリン先住民族から名乗り出る者はいなかったという【加藤2022】。その結果、旧ロシア国籍のサハリン先住民族は日本国籍を持っていると判断され、日本政府は1933年に、旧ロシア国籍の樺太アイヌを全員日本の戸籍に編入することになった。同時に、男性は日本兵として徴兵されることになった。ただし、ウイльтаやニヴフは無籍のままとされ、結果として日本軍にスパイとして利用されることになった【田中了・ゲンダーヌ1978】。

樺太庁は先住民族を1908年頃から約10か所に集住した。家屋を支給し、日本語学校を設置し、教員や「指導員」が配置された他は、原則として先

#### 【参考文献】

- 東俊佑2003「サハリン島をさす呼称:「カラフト」の語源に関する覚書」『アジア文化史研究』3、東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻
- 安部洋子2015『オホーツクの灯り～樺太、先祖からの村に生まれて～』クルーズ
- 池上二良2004『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会
- 井上紘一2018『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～』東北アジア研究センター叢書63

住民族だけが暮らす人工的な村落が造成された(次第に和人も混住するようになる)。勸農を主とした北海道旧土人保護法は施行されず、集住村落の近くに設定された「土人漁場」という定置漁場からの収益を先住民族政策費に充てた。いわば、先行していた北海道における同化政策とは異なる内容が日本領樺太で実行された。河川におけるサケマスの捕獲は制限付で「許可」されていたことも、北海道アイヌへの政策と異なる点だった【田村2010】。

#### 5. アジア・太平洋戦争による3度目の大きな移動

1945年8月9日、ソ連軍が日本領樺太や旧満洲に侵攻した。このため、直後から北海道への脱出が始まった。1946年12月、GHQとソ連によって引揚船での日本国民約27万人の移送が開始され、1949年にかけて、樺太アイヌ約1,200人が北海道へ移住した(3度目の大きな移動)。

筆者は、樺太アイヌにとって〈故地〉であるサハリンをなぜ離れる決意をしたのかインタビューしたところ、次のような回答があった。上記のような同化政策のため、日本国民になっていたという自覚があったから。また、日本兵はソ連占領下のサハリンに戻れなかったことから、家族が再会する地として北海道以南の地へ移動する必要があったから。また、戦前の日本における反共政策や日ソ戦争を経て、ソ連政府への嫌悪感があったから(ソ連人は悪い人たちじゃなかったという感想も多い)。この結果、樺太アイヌは北海道を中心として各地に移住した【田村2008】。

#### まとめ

長い間、樺太アイヌは中国や、ロシア、日本という巨大な軍事力、経済力を持った国家間で翻弄されてきたが、その中にもあっても、サンタン交易や、独自の文化や技術を活かせる機会があった。しかし、日露の国境紛争がはじまってから、とくに日本領になってからの同化政策によって日本国民となり、3度の大きな移動の結果、現在では樺太アイヌのほとんどが日本に住むようになった。ピウスツキが記録した時代は、このような長い歴史の一コマだったといえる。

(たむら・まさと、国立アイヌ民族博物館)

- 荻原眞子訳2000「B. ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6
- 葛西猛千代1928『樺太土人研究資料』
- 葛西猛千代1931「アイヌ民族名」『樺太』3-7、樺太社
- 加藤絢子2022『帝国法制秩序と樺太先住民—植民地法における「日本国民」の定義』九州大学出版会
- 樺太アイヌ史研究会編1992『対雁の碑』北海道出版企画センター
- 菊池徹夫1989「蝦夷(カイ)説再考」『史観』120
- 金田一京助1931「アイヌ語学講義」(再録:『金田一京助全集』5、三省堂、1993)
- 河野広道1931「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」(再録:『河野広道著作集1 北方文化論』北海道出版企画センター、1971)
- 児島恭子2003『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史の変遷』吉川弘文館
- 佐々木史郎1996『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会
- 沢田和彦2019『プロニスワフ・ピウスツキ伝 〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』成文社
- 田中了、ゲンダーヌ・ダーヒンニェニ1978『ゲンダーヌ—ある北方少数民族のドラマ』現代史出版会
- 田村将人2008「樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
- 田村将人2010「樺太庁による「土人漁場」を中心とした先住民政策の概要」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史:北方文化共同研究報告』北海道開拓記念館
- 田村将人2011「先住民の島・サハリン:樺太アイヌの日露戦争への対処」原暉之編『日露戦争とサハリン島』北海道大学出版会
- 田村将人2013「異民族に関する法律作成についてのサハリン島武官知事官房ファイルに見るピウスツキの事績」沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』埼玉大学教養学部・大学院文化科学研究科
- 知里真志保1954『分類アイヌ語辞典 人間篇』(再録:『知里真志保著作集 別巻Ⅱ』平凡社、1975)
- 中村和之2014「中世・近世アイヌ論」『岩波講座 日本歴史』20

### 会場アンケート集計2 (感想・質問)

- ⑤江戸時代末から第二次大戦終了までのアイヌ等の動きの概要が理解出来てとても有意義な講演会だったと思う。最後のエンチュウのお話、とても関心がありました。今日の表題の講義からは主旨が違ふと感じた。意見交換出来る雰囲気無くして残念。別の機会にしっかりと聴きたい話ではあります。(アルバイト、60代)
- ⑥ポーランド人ピウスツキとカラフトアイヌのかかわりがわかりやすかった。色々勉強になりました。ありがとうございました。正しく学ぶこと大事ですね。(主婦、70代)
- ⑦アイヌの衣類については、白老や網走などで多くの展示物を見学しましたが、繊維についてや織り方についてなど細部までは知れませんでした。今回の佐々木先生のご説明で知ることができて大変勉強になり楽しい講演でした。樺太アイヌの歴史については、私が住んでいる江別にも関連があり大変興味がありました。田村先生の説明によってより詳しく知ることができました。(会社員、40代)
- ⑧樺太アイヌの歴史、織物文化など大変貴重なお話、興味深きかせていただきました。ありがとうございました。最後に大変貴重なお話がきけてよかったです。
- す。当事者を講演者としてきちんと話をうかがう時間をとってプログラムに含めて欲しかったです。(本日のイベントが実質的に樺太アイヌに関するものでしたので。スラブ・ユーラシア研究センター研究員、30代)
- ⑨テーマから話が広がっていく事で、元々の事を多くの日本人が知らない事柄だと再認識した。田澤氏のお話の時間があつたのが良かった。(会社員、50代)
- ⑩研究者や当事者目線のお話を聞くことができ嬉しかった。この場に足を運ばなければわからないことを知ることができて、本当によかった。貴重な機会であった。(無職、30代)
- ⑪たまたま小説『熱源』を読んでいたもので、内容がかぶり、理解した部分もありました。短い時間内に多くのお話しは難しい！(パート、70代)
- ⑫エンチュウの方のお話が心に響いた。我々は自分達の負の歴史にもっと目を向けていかねばならない。(無職)
- ⑬とても興味深い講義でした。時間がもう少しあると良かったです。(無職、60代)
- ⑭時間が足りず残念でした。もっとゆっくり聞きたかったです。(自営業、60代)
- ⑮アイヌの人達自身の話が聞きたいと思う。(主婦、60代)

[以上]